

へと発展していく。そのために、“夕方には帰らましようの音楽”、“飲食マナー、ゴミ出しマナーの守られるまち”、“子どもの溜り場を見守る目”といった提案がなされている。

こうした考え方の延長線上に、“商店街の存在が大切なのではないか”といった問題提起がなされる。毎日のように日常生活用品を買い求めてきた地域の商店は、単なる購買施設ではなく、地域の人々が子育ての情報を交換するコミュニティーの空間であり、商店で働く人々は、地域で子ども達を守り育ててきた存在である。今、こうした地域の商店街が衰退し、逆に子ども達にも危険な空間になっている。こうした状況に目を向けていくことが、子ども達の安全なまちづくりに大切だというわけである。

子ども達を犯罪の危険から守っていくためには、地域に存在する危険な空間を排除していただくだけでは不十分である。“子ども達が安心して遊べる施設づくり”“児童館や図書館などの広く子ども達を受け入れる施設を整備する”といった意見にみられるような建設的なまちづくりも重要である。遊びを中心とした子ども達の地域生活は年齢と共に発展変化する。こうした成長に対応した子ども達の地域施設の整備が必要である。この点で特に重要なのは、中・高校生達の地域での居場所づくりである。相当の運動量を要求するこれらの年代の遊び（生活）空間は、過密化を深める日本の都市では不足がちである。中学生や高校生の地域での居場所づくりは、犯罪の危険から彼等を守るためにも緊急の課題の一つである。また、これらの施設（児童館・図書館等）や集合住宅等の建造物のエレベーターの内外で犯罪が発生しており、“監視カメラをつける”といった要望も出ている。

（3）子ども自身の自衛

犯罪から子ども達を守っていくためには、子ども自身が自らを自衛することも必要である。こうした点に関して、子ども自身が心がけたり、親をはじめ大人の側が子どもに教えていることには、次のような事があげられる。

<人数について>

遊びをはじめ、地域でいろいろな生活をする時に、できるだけ一人での行動を避けることがあげられる。“一人で遊ばない”“一人で出歩かない”“エレベーターを一人で乗らない”“集団登下校を毎日実行する”“できるだけ何人かで遊ぶ”といった意見に象徴される。犯罪危険の実態調査でも、一人で居た時を中心に少人数の時に犯罪の危険にあっている割合は高く、地域では友達と一緒に遊ぶ・登校するといったことが望まれる。そうした意味で理にかなった自衛ではあるが、子どもの生活の多様性からみて限界のある手段でもある。

<時間について>

“帰宅時間を守らせる”、“遅くまで遊ばないように”といった意見に象徴されるように、子どもの戸外生活の時間について気をつけようとするものである。この点については、子どもは時計を持って遊んでいるものではないので、地域で「帰りましょう」の音楽の放送を望む意見もある。しかし、子どもの遊びは時の経つのも忘れて没頭するものでもあり、限界のある手段である。この他にも、“夜遅く塾帰りをする子を見かける。いかがなものか…”といった意見にみられるように、子どもの生活の夜行化に疑問が出されている。時間を気にせずに生活できた安全な時代が崩壊してきている現実に、一定の対応策が求められていることだけは明らかである。

<空間について>

遊び空間についても一定の自衛策がみられる。“暗い所へはいかない”、“できるだけ大人のいる公園で遊ぶ”といった意見が象徴的である。ここで気を付けなければならないことは、大人の目からみて地域の危険な場所で必ずしも子どもが犯罪にあっているのではないということである。子ども達もそうした場所は避けていることが少なくない。一定の自衛はしているのである。そうした場所以外の所で犯罪危険の多くが発生している。こうした実態をみると、こうした自衛策にも明らかな限界がある。

<その他の自衛策について>

“知らない人にはついていかない”という意見は多い。こうした人間観を子ども達に教えていくことには抵抗をもちながらも、こうした意見を肯定せざるを得ない人々が少なくない。ここまではいかないが、“自分がヤバイと思ったら、すぐその場から立ち去る”といった意見もある。途中で危険を感じたらすぐその場を離れることを指示している。“お金を不必要に持たせない”、“貴重品（高価なもの）をもたせない”といった意見もある。逆に“非常ベルを持たせる”といった意見もある。“日常から明るくあいさつのできるようにする”といった意見もある。地域の人々と親しくなり、地域のなかで守ってもらおうというものである。“学校等で本当にあった犯罪の事例を子ども達に話し、ある程度警戒心をもたせる”といった意見もある。プライバシーに十分注意しながらも、子ども達にも現実の姿を知らせていくことは必要な事であろう。

以上が、子ども達の自衛策としてあがってきた意見の主なものである。これらはいずれも、子どもの生活の実態からみて限界をもつものである。また、余り行き過ぎた自衛策を子ども達にとらせることは、子どもの人格の発達にマイナスの要因になることも考えなくてはならない。子どもを犯罪から守ることは、子どもの豊かな人格の

発達と共存する形で、むしろその一環として検討されなければならない。こうした点からみるならば、子ども自らが犯罪の危険から我が身を守るということに過大の期待をかけてはいけない。子ども達が育つ環境面での改善にこそより大きな役割がある。

(4) 地域の大人・組織

<大人同志の関係について>

子どもを犯罪の危険から守っていくために、地域の大人同志の生活の仕方について少なからぬ意見が寄せられている。“住んでいるまちの人達が知り合いになれば、誰れもがお互いによく声をかけあえることができ、気安く話しができる間柄になれるといい”といった意見に象徴されるように、日常生活での近所づきあいの大切さをあげる意見は少なくない。しかし現状は、“同じ建物に住んでいても、あいさつもしない状況”が少なくなく、こうした状況が子ども達の安全のためには決してよくないことを理解している。そのために、“親子で地域の行事・活動等に積極的に参加し交流を深めている”といった意見もある。こうした活動によって、大人同志のコミュニティーを深め、子どもの顔や名前も多くの地域住民に知ってもらおうというものである。

<地域の子どもとの関係について>

“無関心にならず子ども達に目を向け、他の子どもに対しても自分の子どもと同様に関心をもつ”といった意見は少なくない。また、“昔のように子ども達をきちんと怒れる大人が必要”といった意見もある。これらの意見は、地域の大人が自分の子どもだけではなく、地域の子ども達に広く目を向けていくような環境づくりの大切さを指摘したものである。しかし、現実にはこうした環境づくりが増々難しくなっている。ここでも理想と現実にならぬギャップ（落差）があり、それに苦悩する地域の大人達の姿がある。こうした点をふまえて、“大人もできるだけ子どもと遊ぶ”とか、“父親も仕事する会社のある場所だけでなく、家族の住む場所の事をもっと知るべき”といった意見が出ている。

<自分の子どもとの関係について>

大人が自分の子どもとの関係についても注意すべき幾つかの意見がある。“家庭環境が大切である。今、心が身体の成長に比べて成長していないので、心を成長させる倫理・道徳の教育が大切”といった意見に象徴されるように、親が自分の子どもと日常的に話し合い、善悪の判断をはじめ社会生活をおくるための心の成長を促していくことの重要性を指摘している。これは、子どもが犯罪の加害者（当事者）となっていない為にも必要な事である。家庭環境の再点検も必要になってきているという自覚